

大和遺跡

(A 地点)

1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

鹿児島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第70集

大和遺跡（A地点）

頁・行	誤	正
6・12	暗黄褐色粘土	暗黄褐色砂質土
12・20	出土してある。	出土している。

大和遺跡

(A 地点)



1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本書は、農村総合整備モデル事業（津谷線）に係る大和遺跡A地点（甲奴郡上下町大字矢野字桑原920-1, 927-1・4）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、上下町から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの調査研究員山田繁樹・恵谷泰典が行い、整理作業及び本書の執筆・編集は恵谷が行った。
4. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
5. 本書に掲載した第2図は、建設省国土地理院発行の1:50,000の地形図（上下・府中）を使用した。
6. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。
SA：楊列，SB：掘立柱建物跡，SD：溝状遺構，SK：土壙
7. 採図と図版の遺物番号は同一である。
8. 土器の断面は、須恵器は黒ヌリ、縄文土器・土師器・瓦器は白ヌキ、陶磁器はアミ目とした。

目　　次

I はじめ	(1)
II 位置と環境	(2)
III 調査の概要	(4)
IV 遺構	(6)
V 遺物	(10)
VI まとめ	(12)

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1:5,000).....	(1)
第2図 周辺遺跡分布図 (1:50,000)	(3)
第3図 周辺地形図 (1:1,000).....	(4)
第4図 遺構配置図 (1:200).....	(5)
第5図 SK 1 実測図 (1:40)	(6)
第6図 SK 2 実測図 (1:40)	(7)
第7図 SB 1 実測図 (1:60)	(7)
第8図 SB 2 実測図 (1:60)	(8)
第9図 SB 3 実測図 (1:60)	(8)
第10図 SA 1 実測図 (1:60)	(9)
第11図 SD 1 実測図 (1:60)	(9)
第12図 遺物実測図 (1:3, 1:2)	(11)

図版目次

図版 1—a 遺跡遠景 (北東から)	
b 遺跡近景 (北西から)	
図版 2—a SK 1 (北から)	
b SK 2 (東から)	
図版 3—a 検出遺構全景 (南から)	
b 同上 全景 (北東から)	
図版 4 出土遺物	

I はじめに

大和遺跡（A地点）の発掘調査は、農村総合整備モデル事業の一環として計画された津谷線整備工事に伴うものである。計画の目的は農業集落道を整備し、地域住民の利便性を図るとともに農業の振興を目指すことである。今回調査した地域周辺は土器の散布地として知られ、特に昭和30年代の道路工事の際、法面で土器が出土している。このことから昭和61（1986）年4月甲奴郡上下町（建設課）は、広島県教育委員会（以下「県教委」という）あてに、農村総合整備モデル事業（津谷線）の計画地内の文化財等の有無及び取り扱いについて協議を行った。これをうけた県教委は昭和61（1986）年7月に試掘調査を行い、竪穴住居跡・土壙・柱穴・溝を確認し、このうち南側をA地点、北側をB地点とした。県教委は上下町と遺跡の保存について協議し、路線または工法変更を検討したが、調査依頼区間は左右どちらに変更しても遺跡があり、法面も急になるため変更できないとの結論に達したため、A地点については事前の発掘調査を実施するよう上下町に通知し、B地点は法面の切取となつたため立会調査を行うことにした。同年11月上下町は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）にA地点の発掘調査を依頼し、昭和62（1987）年5月センターは上下町との間に委託契約を締結した。調査は同年9月28日から10月23日まで約1カ月間実施した。また、12月12日、上下町教育委員会と共に発掘調査報告会を開催した。

なお、調査にあたっては県教委の指導を得るとともに、上下町教育委員会、上下町建設課及び地元の方々から多大な協力を得た。末筆ながら記して感謝の意を表したい。



第1図 遺跡位置図（1：5,000）

Ⅱ 位置と環境

上下町は広島県の東北山間部に位置し、甲奴郡の南部地帯にあたる。地形は吉備高原上にあり、竜王山（標高768m）、岳山（標高738m）をはじめとする700m前後の急峻な山々が起伏する。平均海拔高度は450mである。河川は日本海に注ぐ江の川水系の上下川と、瀬戸内海に注ぐ芦田川水系の矢多田川があり分水嶺を形成する。町内全般に山岳が連なり約86%を占めるが、中央部にある上下盆地は古くから山陰山陽を結ぶ街道の宿場町として栄え、江戸時代は天領としても発展した。現在でも周辺地域の行政・経済・交通の中心である。

上下町の遺跡を以下時代ごとに概観する。

旧石器時代の遺跡については現在まで確認されていない。

縄文時代では、従来は上下町南端部に所在する扇原遺跡⁽¹⁾が知られ、前期から後期の土器や石器が採集されている。近年の発掘調査において行年遺跡の土壇から早期と中期の土器⁽²⁾が出土している。また今回の大和遺跡（A地点）の調査でも前期と考えられる土器が出土している。

弥生時代では、下郷桑原遺跡、行年遺跡、中居遺跡、道城遺跡⁽³⁾が知られている。下郷桑原遺跡では中期後半の住居跡が検出され、土器・石器が出土している。⁽⁴⁾行年遺跡からは中期後半から後期前半の土器が出土し、焼失家屋が確認されている。中居遺跡では中期後半から後期の土器が出土し、道城遺跡でも後期の住居跡が確認されている。

古墳時代では、古墳が遺跡の主体を占め、現在128基を数える。⁽⁵⁾その大多数は径10m内外の小規模な円墳で、数基単位で古墳群を形成しているが、なかには南山第1号古墳（全長24m）や小塚中山第5号古墳（全長28m）などの前方後円墳もある。昭和57年発掘調査を実施した薄古第1・2号古墳では遺物は出土していないが、箱形石棺と土壇が確認されている。⁽⁶⁾

古代では、今回の調査区の東約100mの丘陵上に寺院跡と推定される下郷桑原遺跡が所在する。平安時代初期の軒瓦・墨書き土器・綠釉陶器が出土し、掘立柱建物跡が確認されている。距離的に近く、同時期であることから本遺跡との関連がうかがえる。

中世では、山城跡が主な遺跡で、有福城跡（県史跡）、翁山城跡、国留城跡などが知られている。有福城の城主は建久年間（1190～1199）に土肥実平が居城したと伝えられている。翁山城・国留城の城主はそれぞれ長谷部氏・渡辺氏と伝えられる。

近世では、小塚八幡神社前古墓があり、発掘調査によって陶磁器・古銭などが出土している。⁽⁷⁾

註

- (1) 服部宣昭、妹尾周三 「甲奴郡上下町から発見された縄文時代の遺物について」『芸備』第6集 芸備友の会 昭和53(1978)年
- (2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「行年遺跡発掘調査報告書」広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第46集 昭和60(1985)年
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「下郷桑原遺跡」昭和59(1984)年
- (4) 妹尾周三氏の御教示による。
- (5) 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「薄古第1号・第2号古墳発掘調査報告書」昭和58(1983)年
- (6) 西本省三・葛原克人編『日本城郭大系 広島・岡山』第13巻 新人物往来社 昭和55(1980)年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「小塚八幡神社前古墓発掘調査報告書」広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第43集 昭和60(1985)年

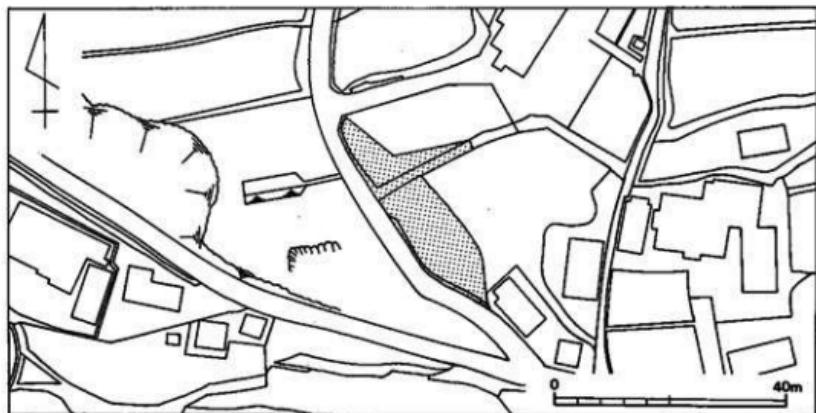


第2図 周辺遺跡分布図 (1:50,000)

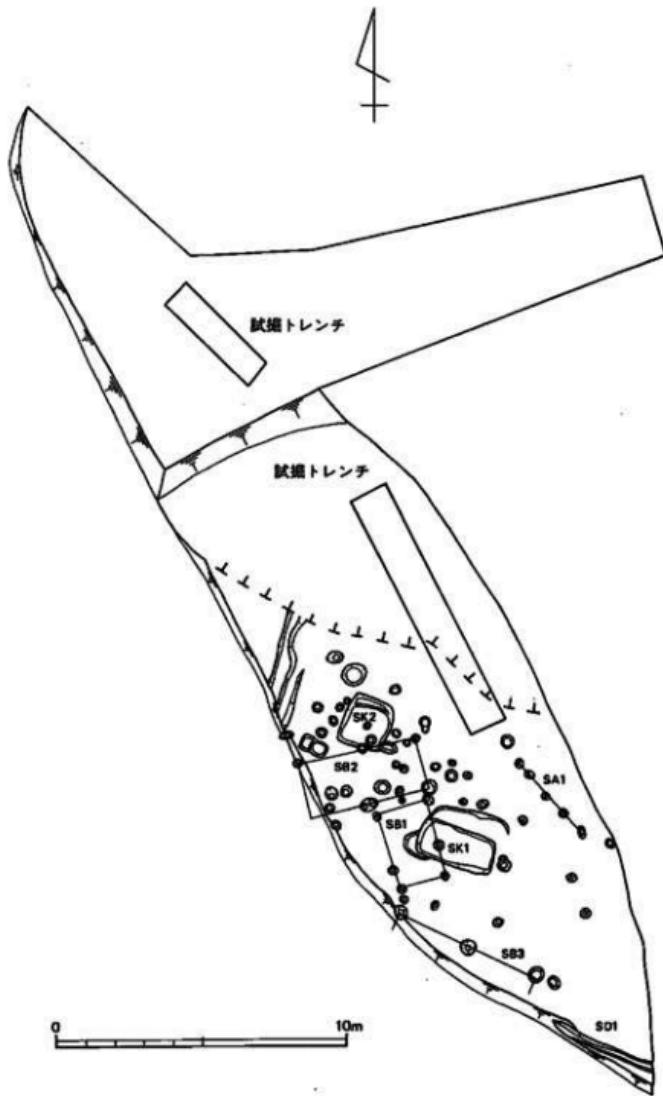
1. 大和遺跡 (A地点)
2. 下郷桑原遺跡
3. 無念寺古墳群
4. 洞山古墳群
5. 高鉢山城跡
6. 国留城跡
7. 上高城跡
8. 浄円寺山古墳群
9. 薄古古墳群
10. 道城遺跡
11. 上下小学校裏古墳
12. 翁山城跡
13. 南山第1号古墳

III 調査の概要

本遺跡は近年まで畑として利用されていて、耕作中に土器の破片などが出土していた。今回の調査は段々畑の上下2段にわたって行った。試掘トレンチの土層断面で確認した基本層序は表土（耕作土）、暗黄褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、黒ボクの再堆積土、地山の順である。このうち第2層以下は遺物包含層で、特に第2層と第3層に遺物が多く含まれていた。遺跡北半の上段はすべて遺物包含層で地山は確認できず、遺構も検出できなかった。また旧地形では谷となっており、東に傾斜する。南半の下段では表土上に暗黄褐色砂質土が薄く堆積しただけで、その下に遺構検出面である地山を確認した。谷状地形は上段から北東に延びて調査区外に続く。遺構としては土壙2基、掘立柱建物跡3棟を含む柱穴群、溝状遺構等を検出した。土壙については須恵器・土師器が出土し、墓の可能性のあるもの（SK1）と性格不明のもの（SK2）がある。掘立柱建物跡は、調査区外にのびるものも含めて規模はいずれも1間×2間と推定される。溝状遺構は調査区南端に位置するが残存状況はよくない。その他後世の掘り込みと考えられる溝状の凹みが遺構の密集する中央部を東西方向に延びると、遺構の北端にある南北方向の溝状の段があるだけである。遺物はほとんどが遺物包含層からの出土で、須恵器が最も多く、土師器、瓦片、綠釉陶器、繩文土器などが出土している。他に柱穴から瓦器や土錐が、また表土から鉄製の歛先が出士している。遺構の時期は、奈良時代後半から平安時代と考えられる。



第3図 周辺地形図 (1:1,000) (アミ目は調査区)



第4図 遺構配置図 (1:200)

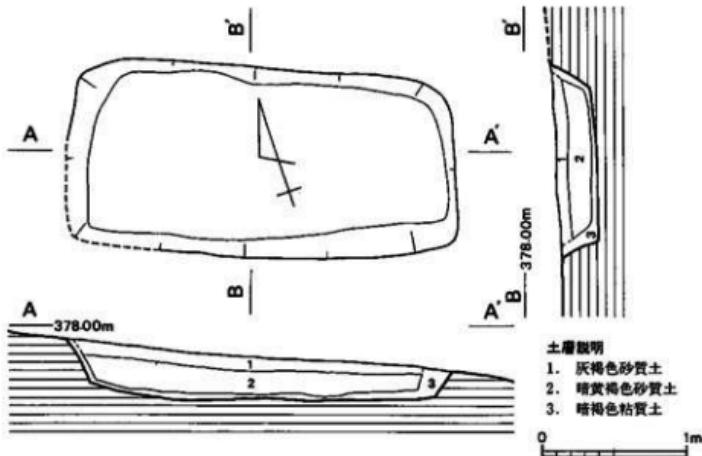
IV 遺構

検出遺構としては土壙2基、柱穴を含むピット60数基及び溝状遺構1を確認した。新旧関係については、土壙の埋土に柱穴が掘られていることから柱穴の方が新しい。溝状遺構との新旧関係は不明である。

(1) 土壙

SK 1 (第5図、図版2-a)

調査区南半部の中央より南寄りに位置する。土壙の北側と西側に段が認められるが、浅く掘り込みも一定でなく、本遺構に伴うものか明確でない。土壙の規模は長さ2.7m、幅1.3m、深さ0.3mを測る。平面形は隅丸長方形で、主軸方向はほぼ東西を指す。壁面はやや急に掘り込まれている。底面との境界線は明瞭である。底面はほぼ平坦であるが、ゆるやかな凹みを持ち西に向かって浅くなる。底面形も隅丸長方形である。埋土の層序は、上から灰褐色砂質土、暗黄褐色粘質土、暗褐色粘質土である。このうち第3層の暗褐色粘質土は壁面と底面に約5cmの厚さで堆積する。この土は棺床土と木棺裏込め土の可能性が考えられるが、堆積状況を土層断面で観察すると垂直方向ではなく立ち上りに沿うことから木棺墓とは断定できない。しかし土壙墓の可能性は捨て難い。遺物は須恵器・土師器の破片や、炭化物も若干出土している。



第5図 SK 1実測図 (1:40)

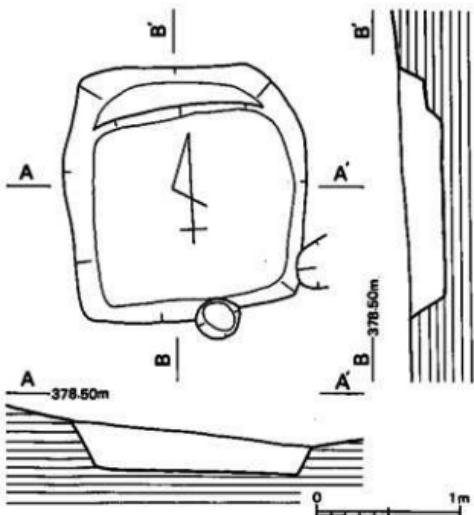
SK 2(第6図、図版2-b)

調査区の南半部のはば中央部に位置する。規模は1.7m四方、深さ0.2~0.3mである。平面形は隅丸正方形である。壁面はやや急に掘り込まれている。底面はほぼ平坦で、西に向かって少し浅くなる。境内の北側に底面から10cm高い位置に幅20cm未満の段をもつが、意味は不明である。埋土は暗黄褐色砂質土と暗灰褐色砂質土の混合した単一層であり、炭化物を若干含む。遺物は須恵器の破片が2点出土しただけである。この土壤は搅乱をうけた可能性があり、性格についても不明である。

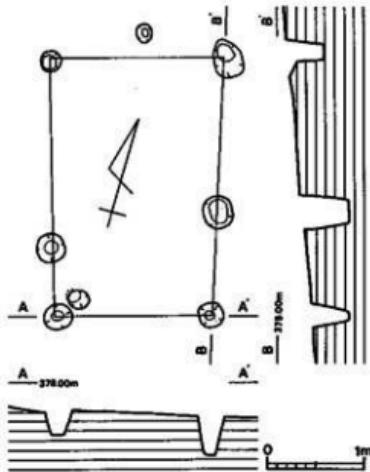
(2) 堀立柱建物跡

SB 1(第7図)

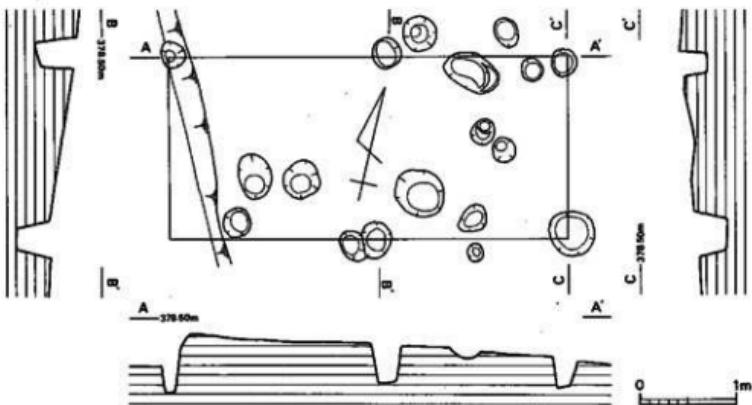
調査区南半部中央やや南寄り、SB 2の南側に位置する。桁行方向はほぼ南北方向である。SB 2と直交するよう隣接する。建物規模は桁行2間(2.7m)×梁行1間(1.5m)である。柱間寸法は不規則で0.7~0.9mである。位置関係も中央の柱穴が対応しないが、それ以外はほぼ対応する。柱穴規模は概ね径30cm、深さ30~50cmを測る。底面レベルにはばらつきがみられる。柱穴内埋土は暗黄褐色砂質土で土層断面には柱痕はいずれも認められない。遺物は須恵器が出土しているが、小片のため時期は明確ではない。



第6図 SK 2実測図(1:40)



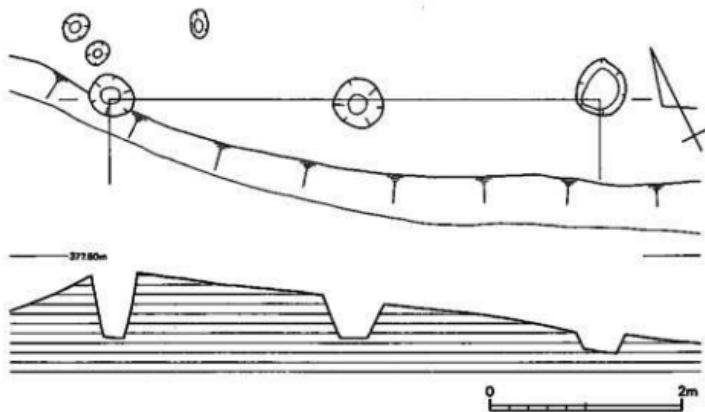
第7図 SB 1実測図(1:60)



第8図 SB 2 実測図 (1:60)

SB 2 (第8図)

調査区南半部のはば中央でSB 1の北隣に位置する。桁行方向はほぼ東西でSB 1とは約90°ずれている。建物規模は桁行2間(4.2m)×梁行1間(1.8m)である。西南隅の柱穴が調査区外のため未確認である。柱間寸法は1.9~2.3mで概ね規則的である。位置関係もほぼ対応する。柱穴規模は径30~50cm、深さ30~60cmとばらつきをみせる。底面レベルも北側が南側より深い。柱痕は認められない。柱穴内埋土は暗黄褐色砂質土である。遺物は須恵器、土師器が出土しているが、小片のため明確な時期は不明である。



第9図 SB 3 実測図 (1:60)

S B 3 (第9図)

調査区南半部の西南隅に位置し、柱穴3を確認している。桁行方向はN64°Wである。建物規模は2間分(5.2m)確認したが、他は調査区外にひろがると予想されるため桁行か梁行か不明である。柱間寸法は各2.6mで規則的に並ぶが、位置関係は対応する柱穴がないためわからない。柱穴規模はいずれも径50cmと大型である。深さは20~70cmとまばらだが、これは後世に削平をうけたため、底面レベルは一定である。柱穴内埋土は暗灰褐色砂質土である。柱痕は土層断面を観察したが、確認できなかった。遺物は須恵器・土師器が出土しているが、小片のため明確な時期決定は困難である。S B 3はS B 1, 2に比べて大規模で柱穴内埋土や方向の違いなどから、時期が異なる可能性がある。

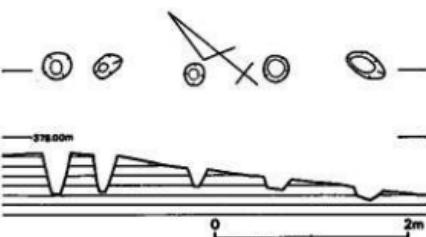
(3) その他の遺構

S A 1 (第10図)

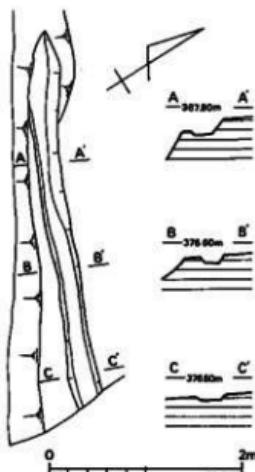
調査区南半部の東端に位置する柵列である。方位はN38°Wを指す。規模は5間(3.2m)、柱間寸法は0.5~0.9mで規則的に並ぶ。柱穴は径20~30cmと小型である。深さは10~40cmとばらつきがみられるが、底面のレベルは一定している。埋土は暗黄褐色砂質土である。遺物は須恵器・土師器の小片が出土している。

S D 1 (第11図)

調査区の南端をかすめるように東西方向に延びる。西側は道路の法面で途切れ、東側は調査区外に続いてゆく。S B 3の南隣にあり、流路方向も建物の桁行方向とほぼ同じであるが、相互関係は不明である。確認した長さは約4m、幅は25~30cm、深さについては後世の削平をうけているため浅く、5~15cmである。断面は逆台形で、壁面はやや急に落ち、底面は平坦である。現地形の傾斜に従って直線的にゆるやかに下る。埋土は暗黄褐色砂質土が堆積する。遺物は須恵器・土師器の小片が出土している。



第10図 S A 1 実測図 (1 : 60)

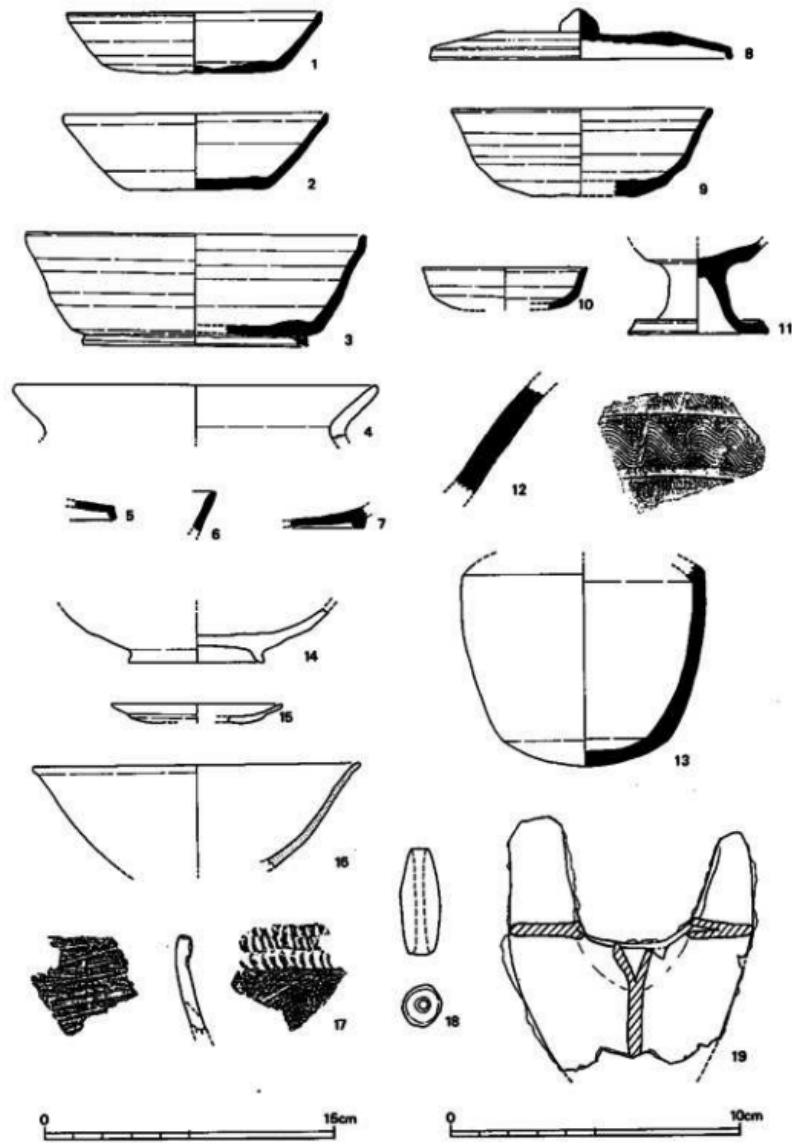


第11図 S D 1 実測図 (1 : 60)

V 遺 物

出土遺物（第12図、図版4）

1～5はSK1出土である。1～3は須恵器杯身である。1, 2は口縁端部が直立気味に立ち上がる。復元径はそれぞれ13.0cm, 13.6cmである。3は貼り付け高台をもつ。復元径は17.4cmである。調整はロクロナデが施され、底部は回転ヘラ切り調整である。色調は暗灰色～青灰色で、焼成は良好である。4は土師器の甕である。復元口径は18.4cmである。調整は口頸部にハケ目が施されている。赤褐色でやや焼成不良である。5は須恵器杯蓋である。6, 7はSK2出土である。ともに須恵器杯身である。8～14, 16, 17は包含層出土である。8～13は須恵器である。8は杯蓋で高く丸味のある突起状のつまみがつき、天井部と口縁部の境に段をもち、端部は外反気味に下る。復元径は15.6cmである。9, 10はともに杯身である。11は高杯であるが杯部は残存していない。杯底部から脚部にかけて暗緑色の自然釉がかかる。12は甕の口縁部と考えられるが、端部が欠けているため口径は不明である。外面に8条の櫛描波状文が2段認められる。13は壺と考えられ、肩部から底部まで残存する。14は土師器の高台付杯身である。全体的に磨減が著しい。16は綠釉陶器の椀である。口縁端部をやや外反させている。復元径は約14cmと推定できる。ロクロナデを内外面に施し、淡緑色の鉛釉を薄くかけている。焼成は良好である。17は縄文土器である。口縁部は内傾気味に立ち上り、肥厚した端部上面には刻み目が、整面には2段の爪形文が施されている。内外面は条痕が認められる。焼成は良いが、断面は黒色である。縄文土器片は全部で5点出土したが、他の4点はすべて体部でそれぞれ内外面には条痕が認められる。器種は深鉢と考えられ、縄文時代前期頃と推定される。15, 18はピットからの出土である。15は瓦質の皿で、外面に段をもつ。復元径は8.8cmと小さく、器壁も0.2～0.35cmと薄い。調整は不明である。色調は黒褐色で焼成は良い。18は土錐である。全長3.6cm、最大径1.4cm、孔径0.3～0.5cmを測る。重さは6.49gである。色調は淡黄褐色～淡灰褐色で、焼成良好である。19は表土層出土の鐵製鋤先である。刃部を欠損しているが「U」字形のもので、現存長は8.7cm、幅8.4cm、厚さ0.4～0.5cmを測る。着裝部の奥行は0.2～1.0cmで、断面は「V」字形である。この着裝のための溝は耳部先端近くまで浅くなりながら延びる。木質痕は残っていない。出土した層位や、他の遺物からみて、平安時代以降の時期と考えられる。



第12図 遺物実測図 (1 : 3, 18・19は1 : 2)

VII まとめ

今回調査を行った大和遺跡（A地点）では、土壙や掘立柱建物跡を検出し、須恵器などの遺物が出土した。しかし、調査区が限られていたため遺構を完全には確認できず、遺物も包含層からの出土がほとんどを占めることから、遺跡の時期や性格を明確に決定することはできない。ここでは、本遺跡の東約100m離れた丘陵上に所在する下郷桑原遺跡と対比して要点を述べまとめにしたい。

両遺跡はともに南向きの低丘陵上にあり、標高差も約20mでほぼ共通した立地条件である。下郷桑原遺跡では平安時代初期の軒瓦を出土し、1間×3間の掘立柱建物跡が1棟確認されているが、瓦葺きの建物としては疑問視されている。寺院の可能性も考えられるが、地形から大規模なものは考えられず、小規模なものしか想定できない。本遺跡で確認した3棟の掘立柱建物跡のうち、SB1・2は規模もほぼ同じで隣接しており、時期も同じ頃と推定できるが、SB3は建物の方向、規模、埋土の違いから異なる時期が考えられる。さらにSB3は調査範囲の関係から2間分しか確認できなかったが、柱穴、柱間規模が大きめなことから建物規模も大きくなる可能性もある。これらの建物跡が瓦葺きか否かについては、小片が数点出土したのみでその可能性は薄いと言わざるを得ない。ただ、瓦の凸面調整に網目叩きが使用されていることや、軟質な焼成などが下郷桑原遺跡と共通しており、両者間に何らかの関連をうかがわせる。なお、出土遺物の多くは上方からの流れ込みによるもので、このことから本遺跡北側の斜面に建物跡などの遺構が存在することは充分考えられる。遺物としては須恵器が多く、下郷桑原遺跡出土とほぼ同型式のものや、後出的要素のある杯蓋・杯身が出土している。他には綠釉陶器が両遺跡で出土している。

以上のことから、本遺跡の時期は平安時代初期頃と推定でき、概ね下郷桑原遺跡と同時代といえよう。ただ、瓦器が小片ながらピットより出土しているところから、中世における建造物等の存在も考えられ、その時代まで存続していた可能性もある。また遺跡の所在する矢野地区内には、本遺跡や下郷桑原遺跡で出土するのと同時期の須恵器を出土する窯跡が存在し、そこから供給をうけていたと想定できることや、綠釉陶器の出土、さらにはこの地域において同時代の類似した遺跡がないことから、本遺跡が官衙などの性格を有する遺跡である可能性も充分考えられる。少なくとも、本遺跡や下郷桑原遺跡がこの近辺において重要な位置にあったことは疑いのないところであろう。



a 遺跡遠景（北東から）



b 遺跡近景（北西から）



a SK 1 (北から)



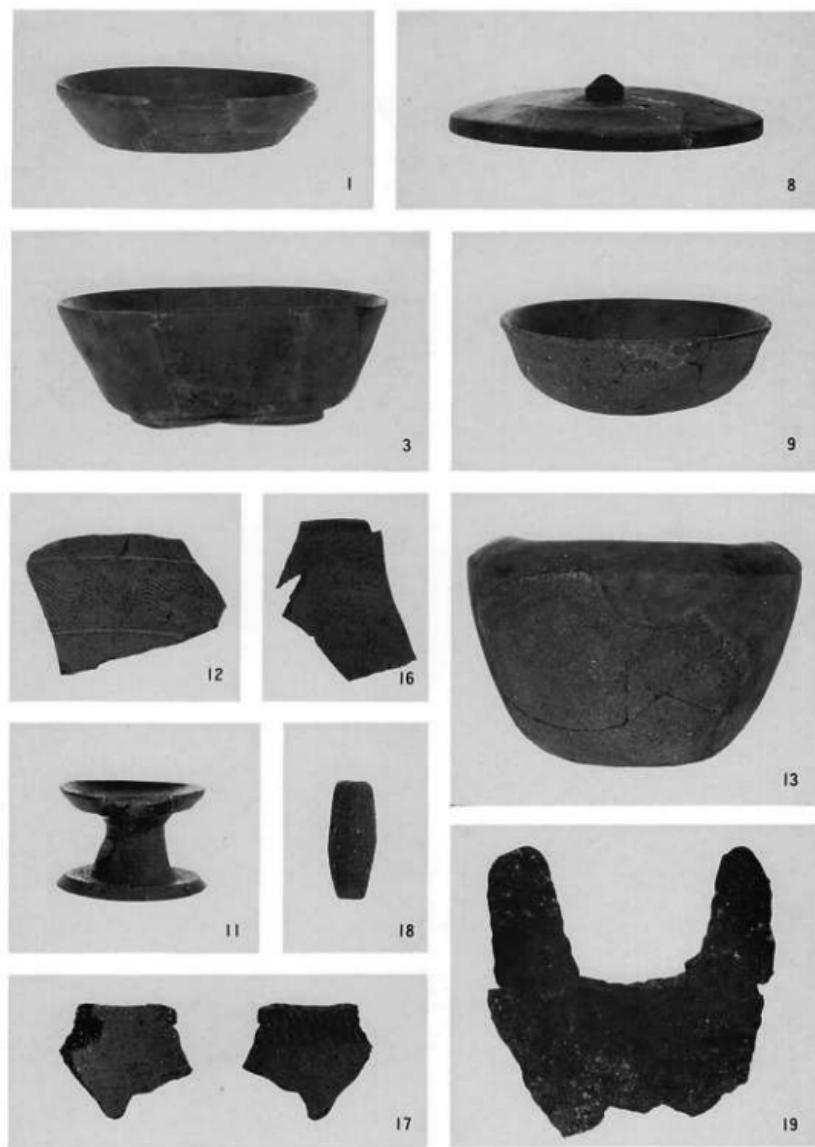
b SK 2 (東から)



a 検出遺構全景（南から）



b 同上 全景（北東から）



出土 遺物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第70集

*
大和遺跡
(A地点)

発行日 昭和63(1988)年3月

編集・発行 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

733 広島市西区鏡音新町4丁目8-49
TEL (082) 295-5751

印刷 株式会社中本本店印刷